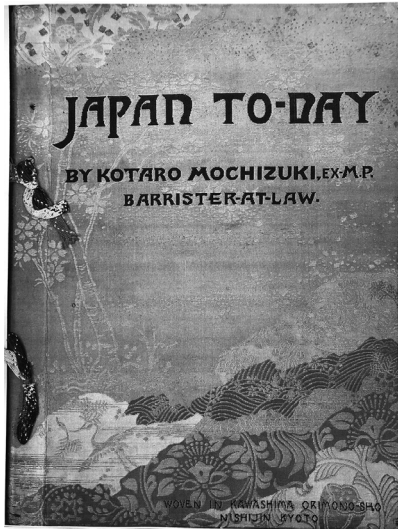


『Japan To-Day (現時の日本)』 (2)

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 Takayuki Onoue

前回 (2月号) に引き続き、望月小太郎の『Japan To-Day (現時の日本)』について見ていく。「序文」によれば、この書籍は特別装丁版と通常装丁版の2種類で出版されている。特別装丁版は、当時日本が条約を提携していた20カ国以上の国々の天皇、国王、大統領や海外駐在の日本大使、公使、総領事館などに贈呈された。左の写真は、天理図書館に所蔵されている『Japan To-Day』の表紙である。両版とも表紙は、当時日本を代表する織芸家川島甚兵衛によってデザインされた。特別装丁の表紙には、金糸と銀糸を巧みに織り込んだ絹織物である「綴錦」と呼ばれる高度な技術を駆使した装飾が施され、武士道や日本人の精神の象徴として桜の花が描かれた。通常装丁の表紙は、金銀の文様をあしらったサテン生地で作られ、「忠度波」と呼ばれた波の表面に桜の花の文様が描かれた。この文様の名称は武士であり詩人であった平忠度が自身の「色紙」にこの文様を用いていたことに由来し、その曲線配置の優美さから非常に高く評価されていた。望月は、これらの表紙には川島が日本人独特の芸術的思想を表現しようと尽力した苦勞の結晶を見ることができるとし、こうした点からもこの書籍は世界の人々に推薦するに値すると述べ、「序文」を締めくくっている。



つぎに、『Japan To-Day』の内容について概観しておきたい。日本という国をできるだけ詳しく正確に伝えたいという望月の強い思いを反映しているためか、同書は日本の現状を紹介するだけでなく、2500年の昔にさかのぼって日本文明の歴史を記し、そのうえで国土、政治、経済、社会、文化などあらゆる分野についての概説を試みている。同書の最初には天皇、皇后、イギリス国王、女王などの肖像画が数ページにわたって掲載されており、「Supplementary Chapters」(補章)や広告ページなどを含めると全部で1,000頁を超える大著となっている。参考までに本編の主な見出しを挙げておく(原文は英語。以下の日本語は筆者翻訳)。

第1章 (3～68頁) 「日本文明史概説」、「日本とイギリスの外交・通商史の概要」、「日英博覧会以前の日本と外国の博覧会」、「英日博覧会協会」など

第2章 (69～104頁) 「日本とその自然美」

第3章 (105～317頁) 「日本の政治組織と国民生活」、「大日本帝国の教育事業」、「内務省と地方自治」、「日本の司法制度の歴史」、「帝国議会と政党」など

第4章 (318～770頁) 「日本の産業経済活動」、「俳優と女優」、「寺院と神社」、「大日本帝国とその勢力圏」など
結論 (771～772頁)

第4章の見出しの一つ「Temples and Shrines」(寺院と神社)では、高野山金剛峯寺、成田不動明王、川崎大師、本門寺、高尾山薬王院、総持寺、善光寺、天理教、豊川^{だきにしんてん}吒呬尼真天、江ノ島神社が取りあげられている。しかし、当時の日本の宗教事情については、本編のこの項ではなく補章に詳しく紹介されている。望月はこの事情について補章の「序文」で、日英博覧会というまたとない機会をとらえ、日本の歴史、政治、経済、社会、文化などを外国人へ詳述する目的で『Japan To-Day』を出版したが、時間的な制約などを鑑みて、日本の宗教、美術、文学、音楽、女性の地位と発展、武士道については、補章として別に発行することになったと述べている。

この補章にある「Religions in Japan」(日本の宗教)では、まず当時の日本には神道、仏教、キリスト教の3つの宗教があり、さらにそれぞれがいくつかの宗派や教派に分かれていると記されている。そして、日本には国教と呼ばれるものはなく、国民の信仰の自由が憲法によって保障され、人々はいかなる宗教をも信仰することができるのであると続く。日本の主要宗教の一つとして儒教を挙げる学者もいるが、望月はこれをヨーロッパにおけるプラトン主義やカント主義のような哲学体系の一つとしてとらえ、『Japan To-Day』では日本の宗教として取り上げていない。一方、神道には聖典が存在せず神概念が他の宗教と大きく異なることから、神道を宗教と見なさないという考えもあるが、神道は祖先崇拜を基盤とし、信仰と礼拝という宗教の本質的な性質を備えていることから、宗教と見なすことは不適切ではないと述べている。とくに、仏教やキリスト教が異国から伝来したものであるのに対し、神道は日本固有のものであり、日本の宗教を語るうえで欠かせないものであると望月は主張している。

つぎに、望月は土着の宗教と外来の宗教の衝突という問題について言及している。人類の歴史において、またいかなる国や地域においても、そのような衝突は避けられないものであり、ローマにおけるキリスト教の歴史、また日本においても仏教とキリスト教が伝来した際に同様のことが起こったと指摘している。しかし、日本の既存宗教は新しい宗教に対して排他的ではなかったとし、たとえ一時的に排他的であったとしても、最終的には包容力を発揮してきたと説明する。現代の日本において、神道の神棚と仏教の仏壇が並んでいる家庭が見られるのであり、またキリスト教と他宗教には神道と仏教ほどの調和は見られないとしても、少なくとも受け入れる姿勢は見られるのであると述べている。そして、日本の三大宗教として神道、仏教、キリスト教を挙げ、各宗派や教派ともども、それぞれの信仰を通じて国家の基盤を築くために協力し、国家への忠誠心と愛国心を育んでいると説明している。

補章にある「Religions in Japan」(日本の宗教)では、このようにまず日本の宗教の概要を説明した後、神道、仏教、そしてキリスト教についてそれぞれさらに詳細な解説を行っている。そして、神道の教派として、神道大教、扶桑教、御嶽教、黒住教、神道大成教、禊教、神道修成派、実行教、金光教、出雲大社教、神習教が挙げられ、最後に天理教の名前が記されている。